



盛装でのオン・ステージ



当日のプログラム

## リサイタル 頃末記

1988年4月14日、ウイーン

リサイタルを行った。場所はムジーケフエラインのブームス・ホール。

この世の演奏家、腹の底では皆そう思っているに違いないとふんざりしているのだが、自分の住んでいる街で演奏会を開催するのが何とい

つても一番しんどい。私にとつては東京とウイーンでのリサイタルがそれに当る。

演奏の仕事をビジネスベースで円滑に運ぶためには、マネージメントの助けを借りるのが普通だ。大きなマネージメントになればなるほど国際的なコネクションも多く、世界を股にかけた活躍が可能となる。

でもここでよく考えてみよう。

世界広しといえどもクラシックの演奏会が商業的にも充分成り立つ都市の数にはやはり限度がある。そしてそれらの都市のホールで催される演奏会は、何もピアノリサイ

タルばかりではない。オペラ、オーケストラ、歌、室内楽、バレエ等々、バラエティーには事がない。それに對して一人前に飯の食えるプロたらん、としてチャンスを虎視眈々と狙うピアニストは、全世界でどれだけいるだろう。

国際コンクールを通じて選抜される超エリートも「毎年」数十人という数である。十年たてば数百人。みな国際音楽市場で空席ができるのを今か今かと期待しているにもかかわらず、幸か不幸か音楽家には健康な人が多く、老齢になつてもかくしやくとして元気な人ばかり…。

Akiba (IAI) wurde 1970 in Tokio geboren. Seine ersten musikalischen Schritte erhielt er mit 5 Jahren bei seiner Eltern als Klavierbegleitpianist. Als PTT absolvierte er an der Hochschule für Musik in Wien (Klavier bei Peter Feuchtmayr) und schloss eine Postdiplom-Abschlußprüfung mit Auszeichnung des Begegnungspreises ab. Er ist seit 1991 Paul-Moor-Preisträger und PTT konzertiert nun an der Folkwang-Hochschule für Musik in Essen, an der Hochschule für Musik und Theater in München, an der Hochschule für Musik und Theater in Hamburg, an der Hochschule für Musik und Theater in Berlin, an der Hochschule für Musik und Theater in Dresden, in den USA und in Japan. Derzeit Lehrtätigkeit an der Hochschule für Musik in Wien.

閑話休題、演奏会を行う場合、見知らぬ土地に行つたほうが気楽、というのは事実である。旅費、滞在費、など経費はかかるにしてもそれは招待側の負担、あるいは自前としてもそれに見合うだけの収入が契約によつて保障される。極端な話、たとえチケットが一枚も売れていくとも、ガランとしたホールで予定されたプログラムを演奏しさえすればお金はもらえる。

一方、自分の本拠地で演奏会をするとなると、経費はかかりぬ、知人は多い、その他たくさんの人リットがありながら、そううまく問屋がおろさぬケースが少くない。

いつでも聞ける地元の知人より評が出たりすると、後々までそのダメージが精神的に尾をひきやすい。

よし、儲け話を待つていても仕方がない、ここはひとつ自分で思つよう、コンサートを自力でやつてみよう、と思い立つて計画した今回のリサイタルだったが、その



広告塔の前で。うしろは自然史博物館



無事にリサイタルを終えて

準備の何たる繁雑さ…。普段は裏方さんとして全ての準備を請け負ってくれるマネージャーの有難さを身にしみて感じる貴重な経験となつた。

当夜のプログラムは邦人作品で開始する事にした。ヨーロッパでコンサートをすると「なぜ日本の作品を演奏しないのですか?」と問われる事が少なくないが、現実問題としてはその選曲が難しい。

いわゆる現代曲を演奏したのでは音響がインターナショナルすぎて、いつたいそのどこが日本的なのか、とのクレームがつきやすい。かといって日本情緒の綿々とした作品は、他の作品と馴染みにくい。

今回選んだのは諸井誠の「ノクターン」、三善晃の「組曲こんな時に」と宍戸陸郎の「トッカータ」

という組み合わせであつた。全部あわせても15分ぐらいだし、何といつても耳に快い。ただし日本を代表する作曲家諸氏にとつては、その主要作品をあえて避けた、と申しわけない選曲となつてしまつた。

そのあとにショパンの2番のソナタ、休憩後にはドビュッシーのプレリユード1巻全曲、というウイーンには縁もゆかりもないプログラム構成だつたが、評判はまずます。

ウィーンで不用意にモーツアルトやシユーベルトを演奏する事によつて「日本人は何事もよく真似る能力に長けている」などといつた腹の立つコメントを貰うのだけに極力避けよう、との意図も多分にあったのだが、まずは思うように事が運び、めでたい幕切れとなつた。